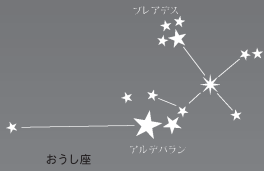


# ポラリスを仰ぐ北の大地から



## 日高での地域医療に思うこと

日高医師会 会長 小松 幹志

私が日高の地に赴任した平成18年当時は、日高7町にある医療機関は物理的な距離だけでなく、連携も十分にとれているとは言えない状況であった。また日高管内で医療を完結できる病医院が少なく、急性心筋梗塞や脳卒中に対応できる病院もなく、すべて2次医療機関のある苫小牧や札幌まで搬送せざるを得ない状況であった。これは患者にとっては通院ならびに緊急搬送時の経済的・心理的負担となっており、さらに医師をはじめとする看護師ならびに医療従事者不足も深刻化していた。

平成21年に日高医師会長に就任し、これら問題の解決にはまず各医療機関の連携が第一と、日高医師会ホームページ(<http://hidakaishikai.or.jp/>)を開設した。これを利用して休日当番医情報をはじめ講演会等の案内をアップし、講演会も積極的に開催し医師のほか、看護師および薬剤師にも参加していただき最新の医療情報の共有と施設間の情報交換の場ともなっている。

さらに新ひだか町が取り組んでいる「バーチャル総合病院構想」は静内および三石にある二つの町立病院が地域の民間病院・診療所や調剤薬局、さらには救急隊、介護施設等と患者データを共有化し、あたかも地域の医療機関が一つの総合病院であるかのように治療を行うというものである。このシステムの導入にあたっては、町内の医療機関との連携を強めるだけでなく、行政機関との連携により医療情報電子化に関する事務職員の増員や予算の確保も行っている。このシステムが実現できれば、さらに日高管内7町の医療機関とのネットワーク化ばかりでなく日胆地区や札幌圏との連携をも強められると考えている。

高齢化や医師不足という問題を抱える地域において、民間を含む地域の医療資源を活用し、機能を分け合いながら地域医療を完結させ、住民が地域で安心して暮らせる基盤を構築していきたいと願っている。



## しょうがい

空知南部医師会 会長 梶 良行

ある日、会場案内の看板を見て「何これっ？」て、思いました。

「南空知南部障がい認定審査会」どうして仮名で書いたのかな…。

『障害者』という表現は、“害”という漢字が入っているのが問題だ。なぜなら、あたかもこの人たちが社会の害悪であるかのような印象を与えるという。そこで『障がい者』と表現する。でもこれで何が変わったのだろうか。どう書いてみたところで『しょうがいしゃ』は『障害』を持っている人を指している。社会に害悪をもたらす人ではないことは誰にも分かる。『害』を『がい』とすることでかえって違和感を持ってしまうのは僕だけだろうか。

“平成23年度障害者自立支援法に係る主治医研修テキスト”の巻頭に「希望するすべての『障がい者』が地域で暮らせる社会の実現」を目指す障害者自立支援法が5年目を迎えました。(中略)この障害者自立支援法においては、それまで対象外となっていた『精神障がい』のある方も対象として『障がい種別』による格差を是正するとともに…(中略)『障がい者』の心身の状態を総合的に表す全国統一の尺度として障害程度区分が設けられました、と記されている。

法律用語は漢字で表し、それ以外は仮名で書いたのだろうか？

障害を持った人はインペアメントからディスアビリティを来し、大きなハンディキャップを負っています。障害を持っていない者が『障害者』を『障がい者』と表しても、「しょうがいしゃ」の社会的に不利な状況は少しも改善しない。“言葉狩り”をして「めくら」を「目の不自由な人」と言い換えても状況は何も変わらない。懇懇無礼。“言葉の暴力”はきれいな言葉を並べて他人を傷つける。大切なことは障害を持った方たちと共に手を取り合って暮らせるような社会を目指すことと思うのだが…。